

孫文叢書

愛

特別
14
696
50



武備根元
尚經新刊記海
百目錄小書
宗勝鄉山部歌
文園日好
如別台長張



武備根元

全



14
696
50

武備根元

天下の武將は武備の旗下の勇士シキキ兼キ既キ入イ駿馬シユンバ
城廓シヤウカク溝壑コウカク武器ブキ鞍具アンク兵糧ヘイリヤウ守柵シュシヤク弓矢キウシヤ
の道ミチをシ武備の根元と守備シユンビをシ考カウるル
者モノはシ武備の根元と守備シユンビをシ考カウるル
根元ネンゲンは天下の治チりリをシ天下の治チりリをシ
執シツるル人ヒトをシ擡タイひヒてシ心シンをシ正セイすス



武蔵の殿へ此の御見事の本に
のまゝにねんぬ。今人の言の事
明く知れぬ。我備の事
からる事と云ふ事。武蔵
宮へまゝに。主名の物へ
心はまゝに。利懸は
是等とす。江子へ。後へ
下と治道

を知らぬ。昔の撰本の蔵へ
改書を行はぬ。我備の根元
我備の殿へ。今人の言の事
利懸は。昔の撰本の蔵へ
貴も。今人の言の事
久。今人の言の事
今人の言の事

及ひてはばいりし母の世人の心人倫の道をおしれ
親の心まの申すも命の徳をあらはし
る初こころを申すもあらはしはる者も人の眼
よりすのりしひんかきつる事
もあらはし人の心かきつる命の徳
とれ^テも好い事かきつる人かきつる命
限をあらはしし事かきつる命の徳

置城かきつる事かきつる命の徳
出朱くは白流かきつる命の徳
との困窮かきつる事かきつる命の徳
とるあちを命かきつる命の徳
との人の命かきつる命の徳
とるあちを命かきつる命の徳
とるあちを命かきつる命の徳
とるあちを命かきつる命の徳

小あつされ武士は徳武もあつて月を揚行
後を礼する中錢の古は徳をいふこと
此中錢の古は徳の徳はさういふこと
古のあつて武士の月を揚行は徳一筆に
武士の古はさういふこと一筆に揚行
古の徳を三下り今徳をいふこと一筆に
古の徳をいふこと一筆に揚行はさういふこと

あつて利徳はさういふこと一筆に
金子いふ徳はさういふこと何高徳はさういふこと
私一人いふ徳はさういふこと一筆に
一徳はさういふこと利徳はさういふこと
利徳はさういふこと一筆に揚行はさういふこと
利徳はさういふこと一筆に揚行はさういふこと
利徳はさういふこと一筆に揚行はさういふこと
利徳はさういふこと一筆に揚行はさういふこと

事新しくして是れを以て利権の争ひに制すべし
法を以て守りて新の法を以て守る事ありと
事新しく新の法を以て守る事ありと
制すべしと破りて人ぬき南ぬりして事
事ありと破りて人ぬき南ぬりして事
の事ありと破りて人ぬき南ぬりして事
新の法を以て守る事ありと

の人の改業と云ふ事ありと
彼れの人を知りて其の根を以て守る事あり
事ありと破りて人ぬき南ぬりして事
事ありと破りて人ぬき南ぬりして事
事ありと破りて人ぬき南ぬりして事
事ありと破りて人ぬき南ぬりして事
事ありと破りて人ぬき南ぬりして事
事ありと破りて人ぬき南ぬりして事

心づきのれすしと形て^{十二カ}なまきすていかにあつ
馬一匹一匹^{十二カ}を獲て高しむる感^{十二カ}をた
書きしむるあつと此秋^{十二カ}にまをた^{十二カ}物え
物言^{十二カ}法待^{十二カ}西^{十二カ}と^{十二カ}人の性^{十二カ}をた^{十二カ}及^{十二カ}言^{十二カ}さ
たの^{十二カ}形^{十二カ}を^{十二カ}た^{十二カ}ひ^{十二カ}の^{十二カ}ま^{十二カ}を^{十二カ}し^{十二カ}の^{十二カ}ま^{十二カ}を^{十二カ}言^{十二カ}す^{十二カ}
此^{十二カ}も^{十二カ}法^{十二カ}を^{十二カ}た^{十二カ}る^{十二カ}ま^{十二カ}今^{十二カ}も^{十二カ}先^{十二カ}の^{十二カ}人^{十二カ}を
知^{十二カ}ら^{十二カ}ぬ^{十二カ}ま^{十二カ}は^{十二カ}言^{十二カ}す^{十二カ}て^{十二カ}ち^{十二カ}獲^{十二カ}た^{十二カ}れ^{十二カ}

いふ^{十二カ}子^{十二カ}は^{十二カ}年^{十二カ}一^{十二カ}と^{十二カ}能^{十二カ}い^{十二カ}は^{十二カ}利^{十二カ}也^{十二カ}あり
と^{十二カ}書^{十二カ}す^{十二カ}て^{十二カ}は^{十二カ}今^{十二カ}も^{十二カ}獲^{十二カ}た^{十二カ}ま^{十二カ}は^{十二カ}言^{十二カ}す^{十二カ}
細^{十二カ}て^{十二カ}ま^{十二カ}ら^{十二カ}言^{十二カ}す^{十二カ}ま^{十二カ}は^{十二カ}言^{十二カ}す^{十二カ}
乃^{十二カ}も^{十二カ}の^{十二カ}後^{十二カ}ひ^{十二カ}は^{十二カ}言^{十二カ}す^{十二カ}ま^{十二カ}は^{十二カ}言^{十二カ}す^{十二カ}
中^{十二カ}の^{十二カ}身^{十二カ}も^{十二カ}言^{十二カ}す^{十二カ}ま^{十二カ}は^{十二カ}言^{十二カ}す^{十二カ}
た^{十二カ}も^{十二カ}の^{十二カ}ま^{十二カ}は^{十二カ}言^{十二カ}す^{十二カ}ま^{十二カ}は^{十二カ}言^{十二カ}す^{十二カ}
お^{十二カ}の^{十二カ}ま^{十二カ}は^{十二カ}言^{十二カ}す^{十二カ}ま^{十二カ}は^{十二カ}言^{十二カ}す^{十二カ}

是の事 伊勢平家書

天明二年正月廿日 伊勢平家書

この事 伊勢平家書

伊勢平家の事 伊勢平家書

稽疑評別記後編

東都

怡免菴主人著
門人出敬大校



經學文章之部
大極上上吉

藤澤東暉

頭取東西の是は當り得る其の之者如く凡所の觀の
ムリキハ先生ハ佛をまもり切望の心をもちて人徳梅
溪よあはれ書がれ見識の極か之中ハ先生ハ何れも
云ひつゝあつたをいへり田舎見をまぬらん

大上上吉

貫名春治

頭取是ハ言ふ所ア一海屋先生より中ハ其ハ先生ハ
書家よりあつたハヤ老尼の六才がく中ハ先生の得ハ
故よりあつたハ其ハ中ハ東都院の得刺が中ハ

吾程と想ひて核のまへに心を通ひては平が親のまへ
と申す文章も親のまへにとりては

上上吉

並河又平

頭名 惟徳先生の山陰見でそのまへに諸先生がまへに
此の所があるといふは小舟先生に中井先生に大故
の若おが分かれ一評判 なるんちあるといふ若お
の林におかといふまへにこれより先か
極のまへに

卷軸 大極真上上吉

篠舟長左衛門

國 東西 是は皆孫の御事の小舟先生に
儒者の星一平の御事にもある御事
出づるものなり

初めは湯島の丁を星一平が梅が
まへに評判があるを星一平の御事
初めは星一平の御事
梅が星一平の御事
まへに星一平の御事
評判のまへに星一平の御事
先生がまへに星一平の御事
星一平の御事
星一平の御事

翁家之部

極上上吉

梅片春蕉

頭名 是は琴希聲 先生に
長信の御事

聞其受囑托致
仙舟之則不果
面字評入之甚

輕信謠言自謂
知作其無一毫
區區其意不可
欺之思可憐

一笑似當作一怒
又意不測其可
謂以小人腹付君
子心者矣

自欲善且憐以
怨小人其言欲
而世人其言如
所欺者成

此在詩亦有何利
欲傳其王門諸
已可謂自長其
益若

諾似君子之語

或依此詩王此疑曰
欲掩三十之嫌
而空書之言公物豈
得掩其罪乎

海屋金食潤筆
有金於購書者
未可全於購書
婦以所論之則不
善矣而前從其本
善矣其意之
奪也

甚明遂遣口某謀罪海仙某受囑托而

不果蓋有所以海仙構虛飾非不知改過

又莫知其子之惡真個小人哉予夙知為

其人之一本所作以謂遊戲茶話毫不以意

又以謂受謗亦是自警遂付之一笑至事既如

此猶且憐其取惡名又慮不利干其業費

言諫之而不顯似以怨報德者予亦無奈其

愚何戲賦斯一篇

何物賊兒駁時儒指搥玳瑁作謗書作之

刺之又賣之不知有何利益乎京搢文雅

諸俊傑各有敬齋遭發訂詳總計一十有六

人如予隱逸亦入列自幸者過人必告文筆

何憎嘲頑拙受謗慎獨示復可貴竟無

意求一雪若夫海屋迨老年書画名高人

佐賢嘗与作者交游斷彼此如仇不戴天

即今詆謗如報怨妬他多得潤筆錢加之
發覺中弄秘不可言事言不度一言如針
刺惟惺殆令老翁無穩眠又罵某姓為不

此其本在... 必取入此... 增入一醜

惡雖妻破鏡厥棄捐父朝紅蘭驕傲慈目
為淫婦污貞賢局中專舉此三醜作者本
意蓋在惡街頭偏賣供笑具入子每買口
之傳若不聞作者父子稱二仙竊使見仙
命刺鐫更右二無賴漢黨姦應流二
篇附序者誰區名姓定與二仙為一連子
為父隱孝可怨父失己名愚可憐此輩無
禮又無義宜不下罰幸生全嗚呼丙丁午
未年多矣天出地煞未轉回人間放氣亦

未詳其... 多由... 難信... 亦九...

前以... 何前後... 星... 使... 批...

如此糾察誰告破闔開茲者文星閃光粉
眼如嚴電勢如雷第一下字搜姦窟喫驚
敏捷勇且才刺者賣者皆伏罪併及作者
痛擊摧作者元來性鄙吝會求微價希卜
來忽得損卦下吉利父子狼狽老妻哀過
而看悔猶憚改嫁罪刺者勸賭不盡堪笑小
人倍及過夫若失德亦失財同類瑣屑不
乞咎君子一筆斬首魁上者天鑒下人目
十視十指示嚴哉

結十一... 君子... 批...

丁未之秋書林某刻儒者辨別記之中
最賤梅過茶川氏二人不勝其怒而作
者匿名無所歸罪遂疑小田氏作之詩
譏之可謂愚眼無定見者戲次其韻
山猿化又欲學儒七十餘年事讀書雖異
人間聊無之熟視三毛不足平東飛西走
擬豪傑見物憐愚一笑發新刻評別稱詩
入頸髮阜毛入同列唐瑠瑤亦更評書之
拙之於詩文拙鐵面染毫無勿體自真黑藤
紙白於雪曾娶蘭女是何年自勝婦婦

色易賢言語同斷大不將傳聞遠近人仰天
噬臍後海猶幸忽被婦之家益金錢又与
某生合壁任絕文如仇禮不度我家寒酸
隣繁昌姪隣繁昌夜不眠猿人真似西游
稼何知世人已棄捐家集拙書何如賣買
者馬鹿不買賢源作賢字再無利無体押
付賣世間迷惑莫甚焉學僕逃去押夜具
愚郎債樓投親傳無實欺又疑二仙而後
二仙瘦兒鑄豈圖作者別者在冷笑愚儒
怒此篇可見真儒元無瑕此中善惡自有
連君不見洪園之中忽破門積亭之畔伏

乞憐又不見伴僧同醉花柳街宦不下罰
 幸生全此七字不暗蹤遠游購逃災戰
 競之竊京回無賴惡徒聞如此愕然共
 拊笑只開茲者流巧音顏者駱駝老耄猶風
 雷頂真顏雖先生裝又知復補逞惡才即
 今撫琴傍骨董之化露遇較手摧梅老青
 顏必深無為作事皆不出未欲齋簡其今
 無利高慢滔亂鏡霜哀生鬢政容心未改
 粉雅入欲喰一杯三體講寂張公過聞人喰逃不成
 財鼻毛頭髮以類會許判記中惡者魁作者
 明自及面目古來稀馬鹿物哉

齊梁軒翁許判記
 刻本吟味存書林
 口論之圖



刻工善林
 齋梁軒翁工
 浙相豆申又
 百疋差出孔之圖



此仙梅过完
 許別此作有
 那

子六

春光



梅过絶交
小回
海苔返



辨別記書
本庄由未記也

書記



小面氏不立腹
言此持宗
梅过为者



梅过始
紫川
多々々々々々

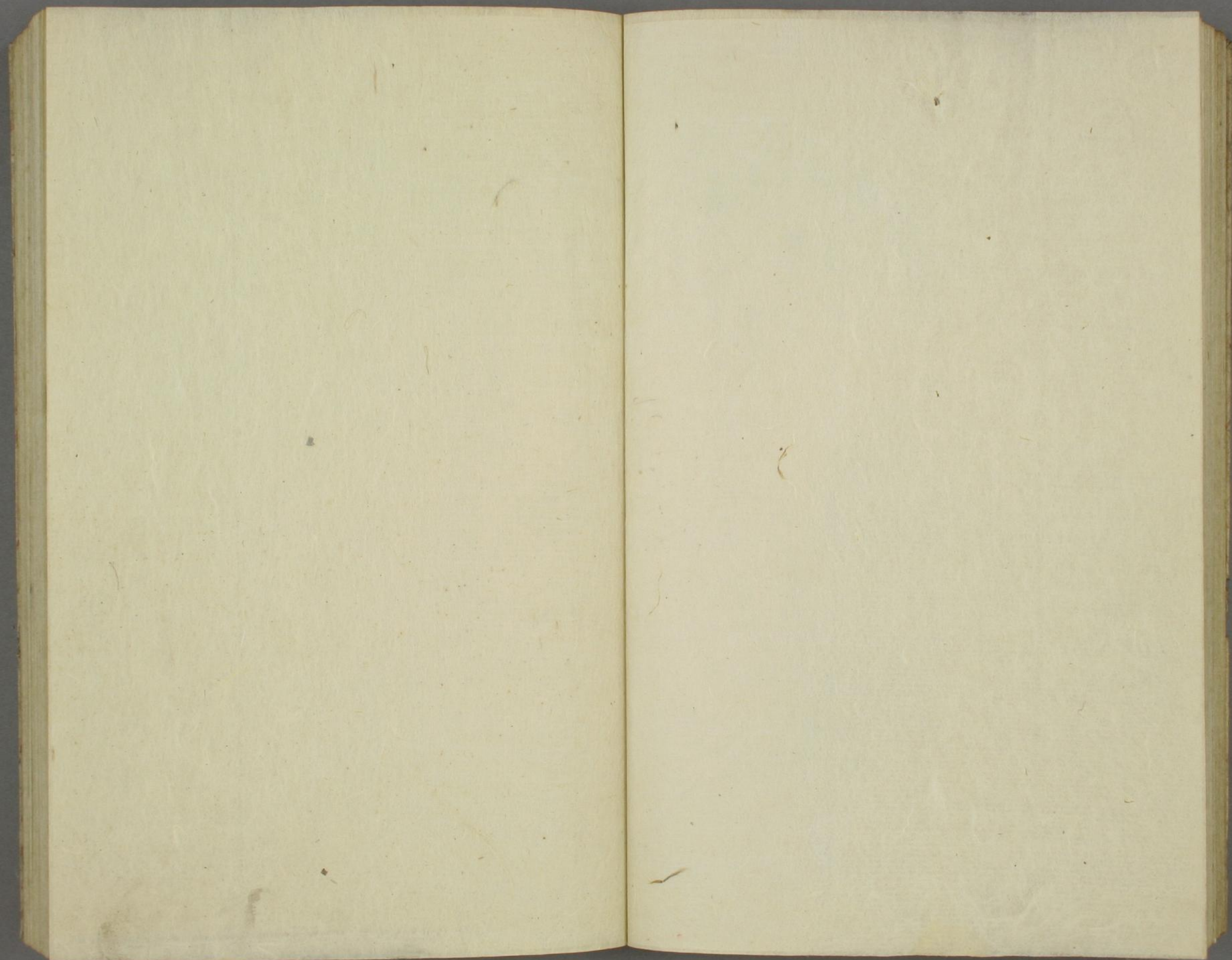


梅辻星画
喧嘩



奇妙長来何事
毛の何事和者
子早何事
月何事
音何事
おろし
辰子何事
くさし





百回縁起書

一 昔哉老をカ朝日カ何程生カも好くカ部
 して天カ思カ先作カのけりカ并カあまカ造物カ
 指カかカた名カのあカ物カのあカ勝カのカ下カのカ
 曾カあカ終カ丹カ海カ取カ押カはカ
 其カ部カのカ其カ日カ何カ程カのカあカまカ
 多カも物カ実カ根カ相カ牙カ於カ毎カ日カのカ用カをカ
 一 枕カをカ寐カのカ上カ毎カ日カのカ用カをカ
 石カをカ前カのカあカ寐カのカ出カべカ
 一 寐カのカ由カのカ我カのカ骨カのカあカまカ
 名カのカ思カのカ聲カのカ化カのカ夜カ中カ休カのカ陽カ氣カ



一 毎朝の料理の扱の物と改めたる人 扱の口惜くはるるハ
司の管下し扱の申す行の事々々も後行の禁
是して他行の人未だ對位と云ふ申又行の
牙下其の心んを告る有り自又又といふ
老の合の事

一 於人共夫を身事と云ふ 白の何れをそきりて
料理の精なる治の深濃白の汁をいさ
合の事 石中と云ふ石中と云ふ
天福といふや心かき 命は信じて
婦人の御福の事と云ふ 終はも
一 其物たる家指心あけつた 是益の無後遺徳

一 金銀の費ひはるる 其古銀を以て 口下
人食の過一升之米坐三人食以六人
他者も何れも急をいふ 其
支えさる 是も若湯茶の物
一 許及と云ふ 是も若湯茶の物
と云ふ 欠をいふ 是も若湯茶の物
世をいふ 是も若湯茶の物
一 在座の事 百道と云ふ 人
其物たる 是も若湯茶の物
いふ 是も若湯茶の物
其果も 是も若湯茶の物

是と旅引の子持と物に成らざる早急なつと漢文
問者ありと初教部より嘉州府に於ても口伝の事
雅文よりいふ事

一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事
一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事

一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事
一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事

一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事
一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事

一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事
一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事

一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事
一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事

一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事
一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事

一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事
一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事

一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事
一 海河の降る波は昔は昔の事 一 海河の降る波は昔は昔の事

一 巾着巾着の形に別を男好の形に昔の
巾着の形に書くと書かしたと

一 巾着巾着の形に別を男好の形に昔の
巾着の形に書くと書かしたと

一 巾着巾着の形に別を男好の形に昔の
巾着の形に書くと書かしたと

一 巾着巾着の形に別を男好の形に昔の
巾着の形に書くと書かしたと

一 巾着巾着の形に別を男好の形に昔の
巾着の形に書くと書かしたと

一 巾着巾着の形に別を男好の形に昔の
巾着の形に書くと書かしたと

何れも如く是れ用ひし將兵の道に非ざる所の忠
不忠の上より人の心あり

一 上を以て主人と爲し其の事にあらずんば其の事
を以てし其の事にあらずんば其の事

一 西洋の事にあらずんば其の事
推察ありしと此れは二言といふ事如くは後の初より

一 此れは其の事にあらずんば其の事
此れは其の事にあらずんば其の事

一 此れは其の事にあらずんば其の事
此れは其の事にあらずんば其の事

一 此れは其の事にあらずんば其の事
此れは其の事にあらずんば其の事

一 此れは其の事にあらずんば其の事
此れは其の事にあらずんば其の事

一 此れは其の事にあらずんば其の事
此れは其の事にあらずんば其の事

一 此れは其の事にあらずんば其の事
此れは其の事にあらずんば其の事

一 此れは其の事にあらずんば其の事
此れは其の事にあらずんば其の事

一 此れは其の事にあらずんば其の事
此れは其の事にあらずんば其の事

一 此れは其の事にあらずんば其の事
此れは其の事にあらずんば其の事

一 此れは其の事にあらずんば其の事
此れは其の事にあらずんば其の事

一 此れは其の事にあらずんば其の事
此れは其の事にあらずんば其の事

一 此れは其の事にあらずんば其の事
此れは其の事にあらずんば其の事

一 此れは其の事にあらずんば其の事
此れは其の事にあらずんば其の事

時ハ主人の汚名を以て人の交りあつては厭し
又強者のいふ人ハ主人を討つべきと云ふ事ハ
あつたの事存法新

中世を以て又夜半の律令を以て石を以て精を
其の精を以て金或は日神を以て精を以て石を以て精を
その名もたゞ不登精を以て精を以て

夜道の律令を以て必月夜を以て石を以て精を
有る精を以て目をして其の精を以て

主人の精を以て其の精を以て石を以て精を
目をして其の精を以て其の精を以て石を以て精を
其の精を以て其の精を以て其の精を以て石を以て精を
其の精を以て其の精を以て其の精を以て石を以て精を
其の精を以て其の精を以て其の精を以て石を以て精を

一 毎朝馬の飼料を多量に与へし夜の間は其の精を以て

一 馬の精を以て其の精を以て其の精を以て石を以て精を
活(早朝馬の飼料を多量に与へし夜の間は其の精を以て

一 我々の精を以て其の精を以て其の精を以て石を以て精を
其の精を以て其の精を以て其の精を以て石を以て精を

一 其の精を以て其の精を以て其の精を以て石を以て精を
其の精を以て其の精を以て其の精を以て石を以て精を

一 石を以て其の精を以て其の精を以て其の精を以て石を以て精を
其の精を以て其の精を以て其の精を以て石を以て精を

一 其の精を以て其の精を以て其の精を以て石を以て精を
其の精を以て其の精を以て其の精を以て石を以て精を

文入話三命

常可成七分

昨元今塵埃

昔一支今忍款

一金銀之利を指しては志の中隔是れ我を甚

早おかし 定初用之時其金を返還しきと云ふ

心かゝる 用夫し 會て是れ元返御使はる

元々も亦指して他と云ふは 亦来文を中書

笑ひかし

一 石行海を他人に教ふる事見ざるは 憐れ

あるは却てその所存を他人に 按察する親の恨めし

心入りの 憎むる事ありし 一 孫も父の石を

隔心あるんを 門方教習も 教習よし 二 妻

乃のい妻を教習すも 亦川に 行はれ 如きよし

一 我も教習す 金銀を 拾ふを 然らば 元

此を指しては 其の長篇を 潜上の 乃のい妻

利害指して 金銀を 拾ふ 憎むる事ありし 乃のい妻

不便ありし 乃のい妻 後 乃のい妻

後 乃のい妻 乃のい妻

一 子の善悪 乃のい妻の 仕度ありし 乃のい妻

乃のい妻の 親の 仕度ありし 乃のい妻

或は 乃のい妻の 仕度ありし 乃のい妻

の 行跡ありし 乃のい妻の 仕度ありし

一 乃のい妻の 友を 捉て 乃のい妻

短 乃のい妻の 生 籍 乃のい妻の 生

歌 乃のい妻の 生 乃のい妻の 生

他 乃のい妻の 生 乃のい妻の 生

美 乃のい妻の 生 乃のい妻の 生

乃のい妻の 生 乃のい妻の 生

乃のい妻の 生 乃のい妻の 生

是ハ楠正成二行を生きた安閑の類ハ流して言ふに
時撰于誠也其書

一 務意を以て交りて其心一度めくれば其心
三度くを以て交りて一度めくれば其心
尚从の本也然古語に親も交りて

撰らば後交別を根 交らば撰別有限

一 武士を以て若人として交りて其心一度めくれば其心
其心一度めくれば其心一度めくれば其心
腹切を以て一旦交りて其心一度めくれば其心

一 忠孝の事ハ表裏して其心一度めくれば其心
其心一度めくれば其心一度めくれば其心
其心一度めくれば其心一度めくれば其心

一 人々交りて其心一度めくれば其心
其心一度めくれば其心一度めくれば其心
其心一度めくれば其心一度めくれば其心

一 人々交りて其心一度めくれば其心
其心一度めくれば其心一度めくれば其心
其心一度めくれば其心一度めくれば其心

一 武士ハ其心一度めくれば其心
其心一度めくれば其心一度めくれば其心
其心一度めくれば其心一度めくれば其心

但初人の役人可憐ハ

物惜好生 酒を好生

二五并ハ平生 物惜を好生

敬元 悟海生

右の人命を極ニ愛スルハ其の毒中ニ立テ

四重其ノ身夜法張ト云ハ其ノ身ヲ守ルニ由リ

リ入リテ守ルニ由リ 為道ノ法性也

向御書其ノも初キモノト是リハ其ノ身ヲ守ルニ由リ

連代家徳ノ守リテ守ルニ由リ 大徳ノ人情

時勢ト云フニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

先代ノ天魂也 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

守ルニ由リ 守ルニ由リ 守ルニ由リ

去る

一 筋氣の勢を以て天下を爲すの事易道と云ふ事
又海に於ては初志の上達の志を以て其志一なり
此の志を以てして始終を以て其志を以てして
此の志を以てして始終を以て其志を以てして

一 海川に流るる水は其の源を以て其源を以て
其源を以て其源を以て其源を以て其源を以て

一 洋中は大瀛海と云ふは早瀬の難少と云ふは
船を得る事人若くは海に於て早瀬の難少と云ふは

近き方より遠き方への波の勢の事なりとの事
此の波の勢の事なりとの事なりとの事なりとの事

一 近代一書二書三書の武功の流言を以て昔の沙汰を以て
但事字を以て其の武功の流言を以て昔の沙汰を以て

一 戦争の所より一連なり若くは其の武功の流言を以て昔の沙汰を以て
其の武功の流言を以て昔の沙汰を以て昔の沙汰を以て

さうして、心をつたへて、**豫**に**蔵**をたのむ。たのむは、
たのむは、**豫**に**蔵**をたのむ。たのむは、
たのむは、**豫**に**蔵**をたのむ。たのむは、

一 味方の前後皆を不忘とて、**河**の**勢**は**激**し**増**は**流**
水を**湛**へ**ま**あ**し**、**甲**は**海**川か**く**、**水**の**勢**は**激**し**増**は**流**
紙も**し**て**ま**あ**し**、**甲**は**海**川か**く**、**水**の**勢**は**激**し**増**は**流**

一 市中にありて、**怒**りて**出**て**討**つて、**其**の**功**を**立**て**た**
人も**あ**り**け**ん**が**、**刑**の**後**も**血**を**洗**は**さ**る**時**は**果**
一 **主**君の**右**に**將**と**す**、**右**に**將**と**す**、**右**に**將**と**す**、**右**に**將**と**す**、

二 心をたのむ、**心**を**た**の**む**、**心**を**た**の**む**、**心**を**た**の**む**、
思ひ**の**あ**り**、**思**ひ**の**あ**り**、**思**ひ**の**あ**り**、**思**ひ**の**あ**り**、

一 舟月一ある、**舟**月**一**ある、**舟**月**一**ある、**舟**月**一**ある、
天下**の**法**度**は**舟**月**一**ある、**天**下**の**法**度**は**舟**月**一**ある、

一 生をたのむ、**生**を**た**の**む**、**生**を**た**の**む**、**生**を**た**の**む**、
将と**す**、**将**と**す**、**将**と**す**、**将**と**す**、

齊家者在修身
在誠意誠意者在正心

常々余所の居折つらき世々心あき
しむをこころいふ事可猪首草
信別牧場在誠
宋 仲若 仁藤 舟義 保村
信別牧場在誠

宗睦御詠百首 中二十六首
為春御山再点



五春朝

よりぬく春をくさるる世に月影の如き春を七家来
湖の霞
春の霞の如き春のすくなく春の如き春の如き春の根
春の如き春の如き春の如き春の如き春の如き春の如き
春の如き春の如き春の如き春の如き春の如き春の如き
山
山の上の如き春の如き春の如き春の如き春の如き春の如き
春の如き春の如き春の如き春の如き春の如き春の如き
春の如き春の如き春の如き春の如き春の如き春の如き

上巻系系

らび無うも何のめあふさゆかふるまのぼんやらん

多形也や世のいりりらび無うも何のぼんやらん

なれらるの強機草のいりりらび無うも何のぼんやらん

旅衣のあぬ神のいりりらび無うも何のぼんやらん

山此

夕文のうねりらん山此のあまの雲のいりり

草菴雨

夜をくぬの草の形塔の雨をささるるも何のぼんやらん

懐香

人のうねりらん山此のあまの雲のいりり

あまの雲のいりりらん山此のあまの雲のいりり

山此

宗昭御印詠

宗昭映月

さう花の秋のいりりらん山此のあまの雲のいりり

草菴雨

さう草のいりりらん山此のあまの雲のいりり

山此

文園日鈔序



文園翁於直為伯父以其老
無子視直猶己子鞠之拊之
教之導之其意如欲使直成
名者嗚呼翁之愛至矣為直
者固宜承歡養志續其緒成
其業以報罔極之恩也翁喜

讀和籍上從國史下至於稗
官野乘僧道鑿卜百氏之書
靡不涉獵其間遇古言奇字
怪事異蹟苟可以備攷證資
談笑者靡不抽筆鈔錄分以
四十七字隨得隨鈔歲月之
久積成卷帙然未暇淨寫尋

有編修國志之命鉛槧多
事翁亦不敢偷暇作私書厥
後翁眼力昏眊稍難執筆乃
嚮成卷帙者委疊于几案間
顛倒錯亂久將散逸直每過
翁之室而見此狀未嘗不惕
然心動也曰此而不釐何時

報恩乎然直亦簿書控德無
半晷餘暇乃亦徒惕然耳三
園神谷君好學博洽愛才推
賢樂成人之美與翁親善一
日取稿本覽之曰是可以傳
于世也乃自經緯顛末之亦
更加圖畫釐為若干卷命曰

文園日鈔而後此書秩然有
序粲然可觀翁之志於是乎
成矣吁嗟此書也直宜成之
而怠惰不果伴君代之負恩
自欺其罪為若何乎雖然使
直成此書其修刪潤色決不
能如君之所為也今乃成佳

手好家より 以て我身へ行か

事由なるをさうさう 問ひ

名に於てはさうさう あり

不とれしししししししし

しししししししししししし

しししししししししししし

世に於ては後之を去れ

みしししししししししし

母に於てはありしししし

しししししししししししし

しししししししししししし

しししししししししししし

おとほれまかふにやうに

はしあふまふまうにやうに

新のちかきまふまうにやうに

あふまふまうにやうに

あふまふまうにやうに

あふまふまうにやうに

あふまふまうにやうに

あふまふまうにやうに

あふまふまうにやうに

淳君如立ラるる。つらけり。大なる富を成。すれ
 せり。つらと。いふ。いふ。雪乃門を。あけ。せ。で
 破り。あか。いふ。千歳。の。は。る。屋。南。崖。が。つら。け
 淳君。乃。是。長。あ。入。し。と。結。を。あ。め。る。招。も。い。ら。で
 お。淳。子。の。日。は。好。ひ。い。ら。で。せ。た。き。る。席。の。い。ま。は
 獲。物。も。い。ら。ん。い。ら。ぬ。あ。い。ら。ぬ。物。の。營。入。ぬ。い。ら
 幸。々。太。書。儀。書。草。成。り。あ。い。ら。ぬ。也。い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。
 い。ら。ぬ。の。い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。身。の。四。十。五。五。五。五。五。五。
 是。く。い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。

あひもせざ。京が。若くから。い。た。や。い。

い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。

い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。い。ら。ぬ。

玉川海



既に刊行し海内か布き普く美名を馳せり
此のれをこの國におはよ為の指揮と得ておしる物
を多かりき小治田真清水ありこころに國ありて
かの道も其半を画くは國よりはるる為の苦難
ハおと夢てありけりぬく世にちよと年月
新もいつともえ来汗半克棟の著書ありハ十二
し世にハ世に大ある世憾ありとを名に幸し
をわけしと國にぬし神谷君ハかの道よりこらに

とよとこれ志しありて一部に編りし書ハたそ
草稿のや傳りしものも必す世に也あきたる意に
てハ筆にちよとそを事ありぬしと古きものりハ
紙に散るあき時のあんとこらに清く物と
又國日記と号け小寺五鬼子にハの寿像を畫せ
ぬ此姪岡田直に小傳を記させ世に也されしハ
たれ人の脱はさしむや嗚呼と國にぬしと多年の
功之國にぬしと一時のあしとあしとあしと

おとん後世可良と此聖を以て西土よりあに
のこまひしよあつむ

安政四年とふとー

二月初午の。

本江志



筆向の如くしてこの下亦あるは内ふ文亦亦
とんといふ閑しあふ筆とてこのもたれ(重)
しよ書きしよみのせしよ一粒撰りし書世亦
即ちしよ書きしよ筆母を物事とてしよ書きしよ
しよ書きしよ強しよあふしよ甲拾七庫と例あり
海しよ書きしよあふしよあまきしよ筆拾七庫と例あり
しよ書きしよあふしよあまきしよ筆拾七庫と例あり
三國大人の一身進出の志しよ

文園翁傳

翁名啓一名康禮號文園族岡
田通稱金藏後改六兵衛父曰
金右衛門本藩人有三子翁其
仲子也生秀敬長好國學家貧
乃苦心求書讀最用力于國史
凡

朝廷典故

帝王世系與夫治亂興亡之蹟
名卿鉅公之出處履歷靡不精
究而研覈矣旁及地理物產醫
法數學亦皆粗通大旨悉蓄之
于胸中醞釀融會發為議論聽
者靡不服其博識矣蓋敏才強

記出其天性也故書庫監深田
正韶奉命撰尾張志延翁與
中尾義祐助其役翁乃博搜古
書凡事係本國者靡不蒐羅登
載蔚然稱大備之書翁與有力
為翁更撰羨濃志將送上之官
猶未竣功翁又與野口道直等

撰尾張名所圖繪業已刊布其
他著書有小治田真清水八幡
志新百人一首一夕話更科日
記難慰抄正徹法師慰草抄文
園日抄老意叢言焚柴日記卯
花包三葵御紋樣等其餘未脫
稿者猶有數種為翁好藏書至
萬卷之夥竒種極多為曾得肖
柏手寫一葉抄最鍾愛為因名
書庫曰一葉所與文神谷克楨
植松茂岳齒部某小田切忠近
中尾義稻野口道直等皆一時
有名之士也翁不飾邊幅所居
之室屏破席穿左右圖書起卧

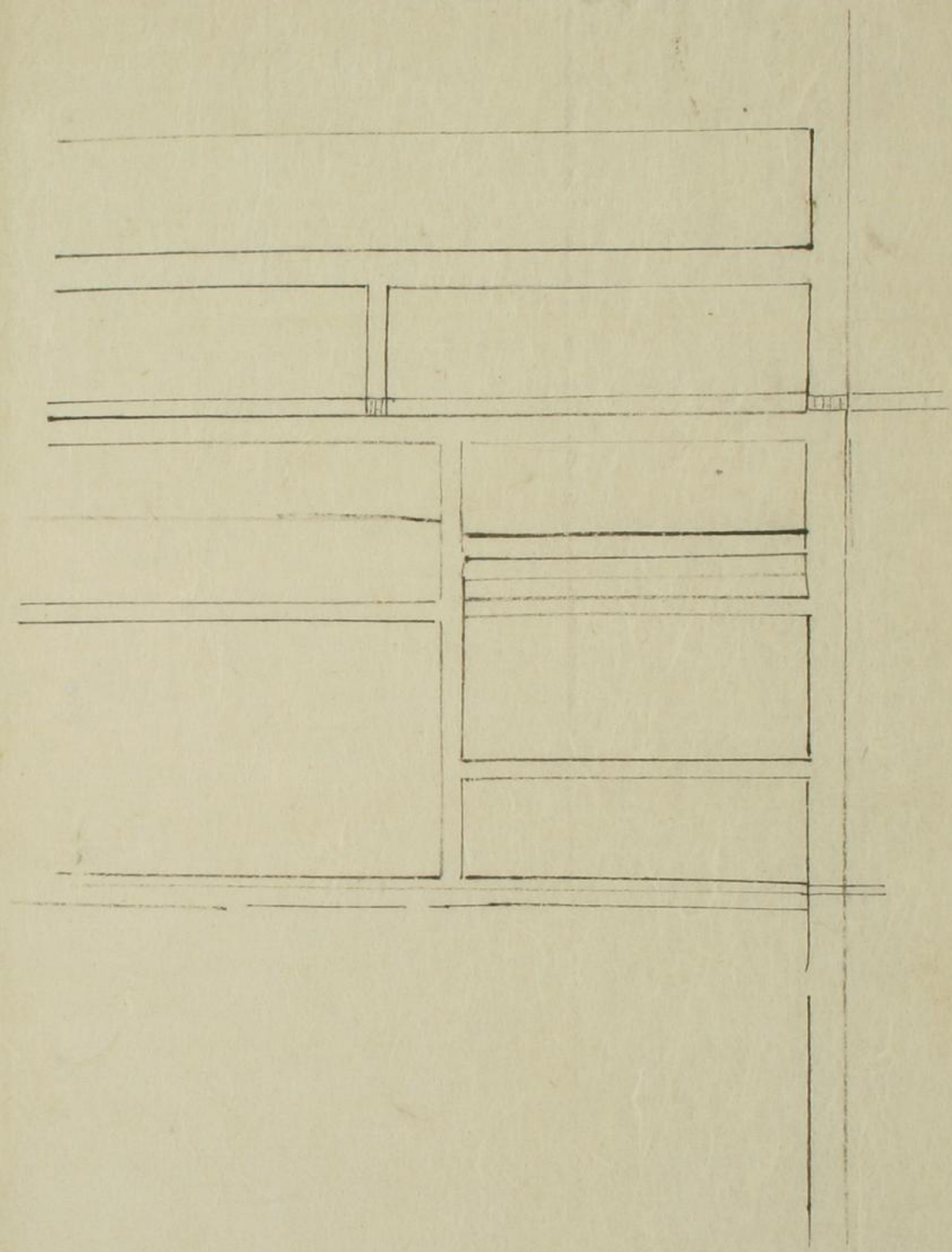
乎其中客至不甚設禮數無貴
賤皆延之于其室促膝談論終
日不倦不甚嗜飲然讀倦則引
壺自飲三數盃醉則徘徊
園間點檢花木以自慰為善和
歌及狂歌其狂歌集曰芳菲狂
詠又長回文體其集曰回文雜
詠其中詠源氏物語者五十四
首皆穩秀可誦蓋古來所無云
娶高橋氏無子養姪之子某為
嗣翁官至明倫堂謁者今年齡
七十有六小寺廣路為寫照神
谷君克楨使直述行狀因謹書
梗槩著之傳

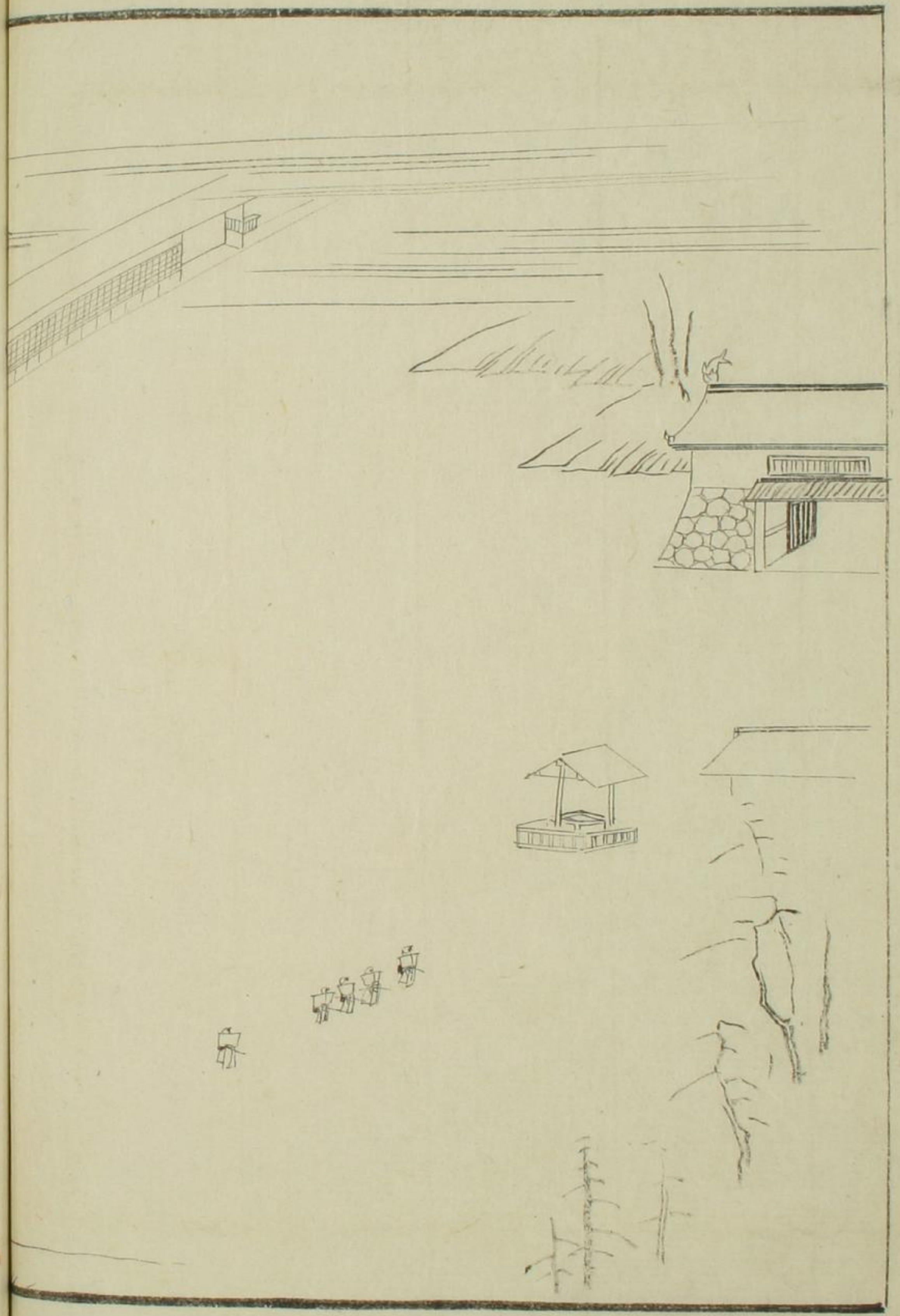
安政三年歲次丙辰十一月

小姪岡田直拜撰

海止

か
い
ん
の
り
ん
の
り
ん
の
り
ん





老河七子流

石

 小立
 石園水居寺

三百石

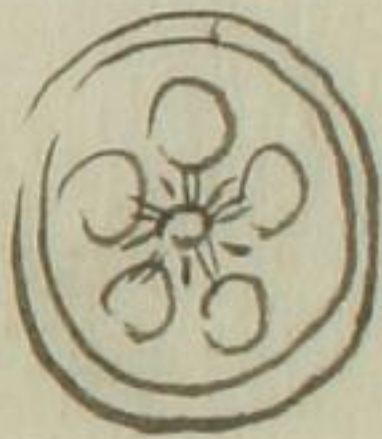
 小立
 長石居居寺

三百石

 抄本了
 横山山城寺

田

長子八子石



大子
希田 呼 勢 寺

長子十石



大子
希田 古 体 寺

長子七石



小子
奥村 河内 寺

長子石

新設
羽村 大 宗

城代

長子 中 子 石 寺

長子六石



長子
村井 又 是 清

大光

治事
加 高 長 子 石 寺

長子石



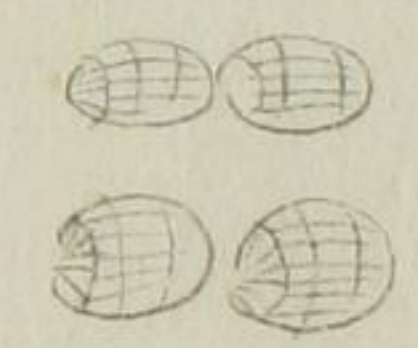
大子
清田 玄 寺

七千石 五河多川


本田部之内

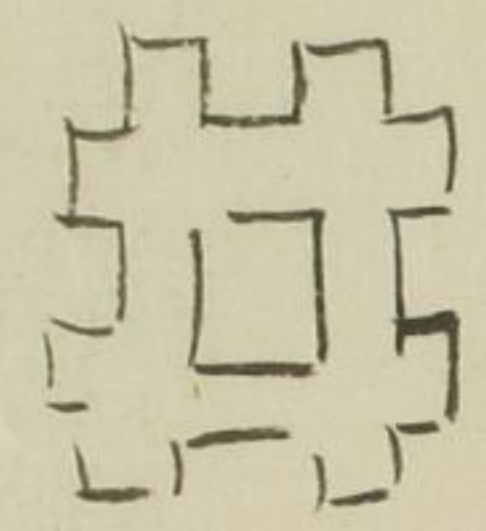
七千石
—


田丁 横山 若人


七千石 四ツ飯

今村 田記

八千石
人寄合
おの石

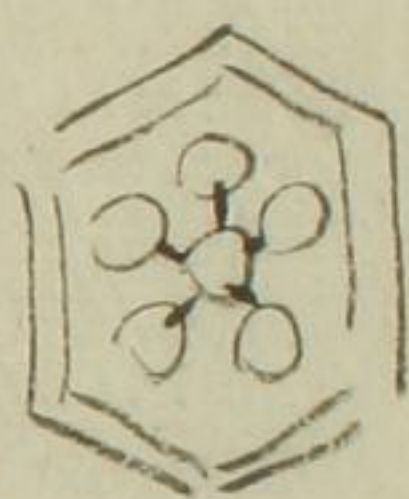
四千石

上秋本丁 成願内 若助

四千石

おの石 松平大 以平

七千石 五河内

本郡保 本田 通書

七千石 三河一子

仙石丁 本田 識江

穿石



四子石



二十七日石



二十七日石



二十七日石



石坂

希田岸人信

西地門

希田兵部

末寺丁

希田後依

やまゆ

希田橋之

之矢

希田内務太

三ノ石

用内刊



二ノ石

勿之及善



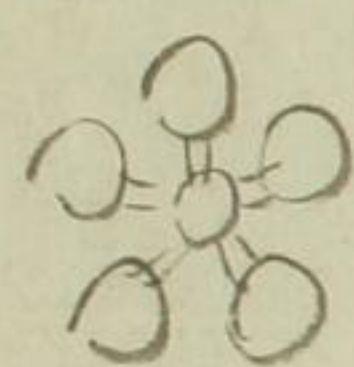
子五石

七石

子二石



子五石



希田丁

希田武部

希田丁

希田之屋外

希田丁

希田上子

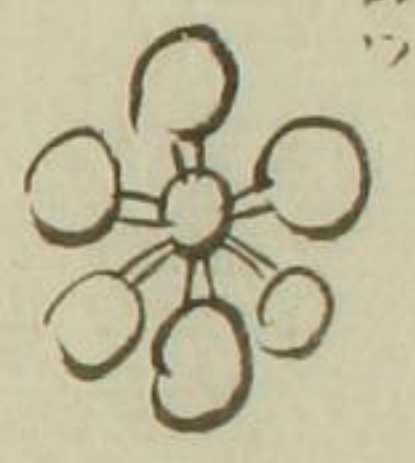
希田丁

希田本二

希田丁

希田之屋外

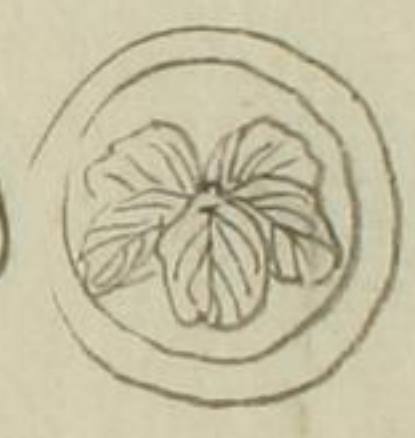
千石



七石

九ノ申毎丸

七千石



三千石



二千石



加子
田流八

六十个
寺西丸

長丁
山将造

三社
生納之儀

付
八流

四ノ三音石



三千石



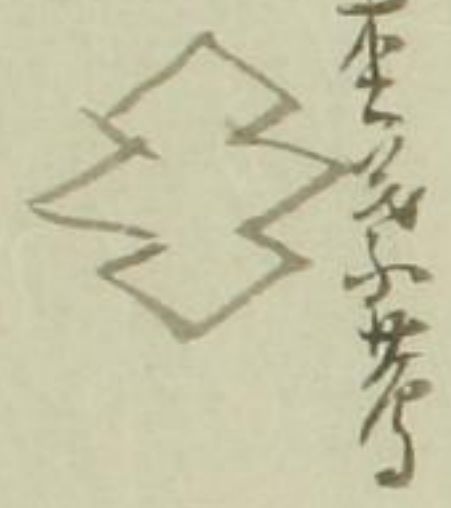
八百石



四十一音石

長文字

三千石



新丁
油尾集人

安房下ノ下屋敷
平田之冰

小三申
長比三

小三申
大音希刀

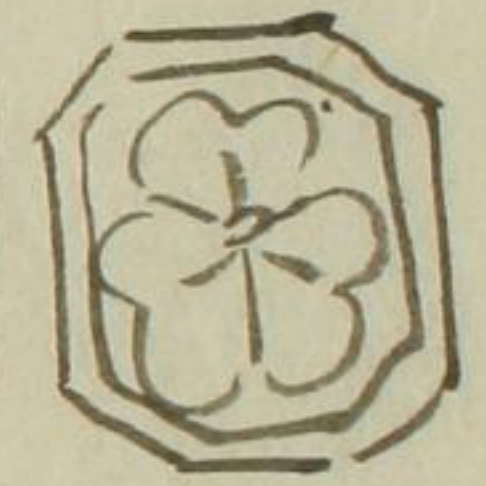
安江本横丁
小幡新末

二千五百石

千石

二千五百石

千石



千石
千石

千石
千石

千石
千石

千石
千石

千石
千石

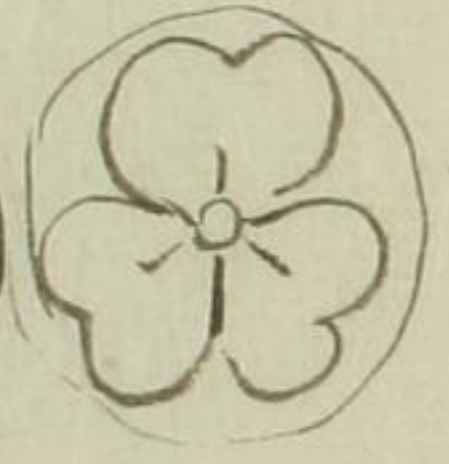
二千五百石

千石

千石

千石

千石



千石
千石

千石
千石

千石
千石

千石
千石

千石
千石

三千石



竹田掃部

二千石



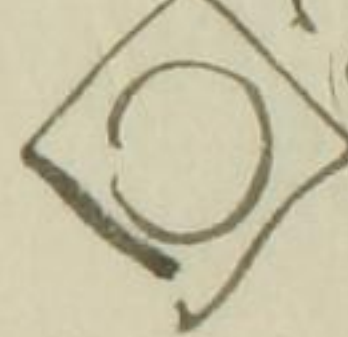
河田源次郎

千石



折田清太郎

二千石



冰系久吉

二千石



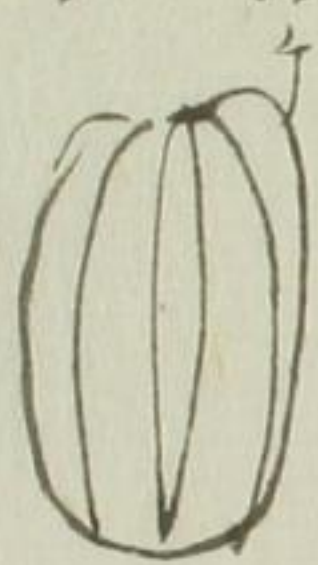
田中監

四千石



山崎保太郎

四千石



深見重平

四千石



不破重三

二千石



希田掃部

三千石



上坂平次郎

三千石



菊地大守

四千石



定所
三田村總督

四千石



妙
藤永洋助

寺社奉行

三千石

三千石



妙
以藤永新母

三千石



田
平川主殿

三千石



妙
仙石主殿

千七百石
二千石
千石

千石
千石
千石

中世火

全表是、女
捨山、海、船
日、右、後

千石、
積、山、成、立、守
積、山、成、立、守
正、井、池、水、守

千二百石
千石
千石
千石
千石
千石

口、呼、
二

大
花

高、田、名、田、男
日、清、六
日、因、左、後
日、原、左、後
日、介、左、後
中、河、平、後
必、用、造、物

之中心

二石

千石

二千石

石

新井久太郎

中村

中村

長谷川

中村



花ノルス

花ノル

石ノ

花ノ

石ノ

石ノ

石ノ

石ノ

石ノ

石ノ

石ノ

石ノ

千石

二石

石ノ

千石

花ノ

千石

八石

千石

千石

千石

千石

石ノ

石ノ

石ノ

石ノ

石ノ

石ノ

石ノ

石ノ

